

新島襄の移動手段（国内）

宮澤 正典

はじめに

新島襄は同志社の創立者として知られるが同時にキリスト教伝道を使命とした。その両者を達成のため京都をはるかに越えて各地に奔走した生涯であった。旅行先の神奈川県大磯で逝くことになったのも、それを象徴している。本稿では北は北海道から南は四国、九州まで、鉄道は限られた範囲しかなく、もちろんタクシー、バスなどのない時代に、どうやって移動したのかを辿ってみたい。

新島が、一八六四（元治元）年七月に函館から密出国し、船中を含めて一〇年余りの米欧体験を経て一八七四（明治七）年一月に帰国（横浜港）した当時の日本の交通手段はどうだったのだろうか。陳舜臣は「クルマと言えば人力車のことであった。クルマで行く、クルマを呼ぶ、といった用法はたいい人力車のこと」であった。「クルマが人力車から自動車になったのは、関東大震災（一九二三年）を境とするようである。欧米では自動車時代の前に、じつは長い馬車時代があった。日本には馬車時代がなく、その代わりに長いカゴ時代があったことになる。日本人は馬車というものを長いあいだ知らなかった」とし、一八六〇（万延元）年咸臨丸で渡米した福沢諭吉が「何頭かの馬を見て、そのうしろの箱型のものに入り、うごき出してやっとこれが馬車だと気づいた」

ことを紹介している。⁽¹⁾

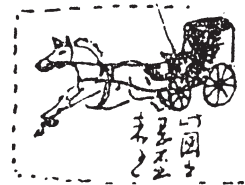
新島襄は一八六七（慶応三）年三月、父民治宛書簡で「扱書生之外当所に住ミ居候人々他
 行の節は必らず函の如き車にのり馬にひかせ候故、足の勞れ候難儀も無之、かつ遠方への旅
 には蒸氣車に乗り候故一日に百里余の旅をいたし候」と伝えていた。

明治維新当時、欧米諸国ではそれ以前から長距離定期馬車が運行されており、さらに新し
 い交通、輸送の仕組みとして鉄道も発達していた。明治政府はこれらの交通制度を同時に導
 入しようとした。一八七〇（明治三）年に民間の旅客、貨物の輸送にあたる陸運会社を設立させる方針を決め、

一八七二年には宿駅制が廃止され中山道郵便馬車会社（東京―高崎）ほか設立された。しかし、それはあくま
 で郵便が主体であった。京都・大阪間に関しては一八七二年に設立された京都郵便馬車会社が伏見を中継地とし
 て京都―橋本間を、大阪会社は枚方で中継して大阪―橋本間を馬二〇頭を用意して一頭立馬車四輦で運行し、当
 初は郵便物だけだったが、後には一輦につき乗客四人も乗ることになったという。⁽²⁾

また、人の歩行が主であった街道は馬車などの通行に耐えられず、政府は鉄道を優先しようとしたため道路の
 補修、改良には十分な予算をあてることがなかったため、むしろ道路の荒廃は激しかったという。⁽³⁾

日本に固有ともいべき人力車は都市内の通行が一般であったが、長距離にも利用された。新島が帰国するとき、
 「早朝、東京郊外の板橋より人力車三台を借り切り、一路安中向か」い、「食事の間小休止するだけで二十時間を
 走り続け、深夜十二時頃、安中に到着」した例もある。⁽⁴⁾ 江戸日本橋から京都三条大橋に至るコースを人力車で七
 日間かけて走った例もあったというが、それ程の長距離は例外であり、五十三次は徒歩、駕籠、やがて部分的に
 人力車が担ったが、通例二週間を要した。ともあれ移動には人力車が馬車より手軽に利用できたから自家用、営



業用に用いられ、一八七二（明治五）年には東京で一万台を越え最盛期の一九〇二（明治三五）年には約四万五千人の車夫がおり、一九一四（大正三）年に東京駅が出来たときにも、まだ構内には二百台の人力車が待機していたとい⁽⁵⁾う。

東西交通に画期的だったのは船便であった。幕末の一八五九（安政六）年に横浜港が、一八六七（慶応三）年には神戸港が開港された。新島襄は東上西下にはこの汽船ルートを利用した。ただ一度だけ一八八三年五月東京からの帰途、三重県四日市に上陸していた。東海道線の全通は一八八九年で東京・京都間に一七時間余、一日二便のみであった。新島がこれを使ったのは神奈川県大磯で没し、遺体が七条駅に送られた時だけだった。新島存命中の鉄道敷設状況を表示しておく。

<ul style="list-style-type: none"> 〔 小樽 1880.11 札幌 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 新橋 1872.10 横浜
<ul style="list-style-type: none"> 〔 高崎 1885 横川 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 神戸 1874.2 大阪
<ul style="list-style-type: none"> 〔 宇都宮 1885 大宮 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 大阪 1877.2 京都
<ul style="list-style-type: none"> 〔 金ヶ崎（敦賀） 仮開業 1882.5 1884.4 長浜 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 京都 1880 大津
<ul style="list-style-type: none"> 〔 東京 1889.7 神戸 	<ul style="list-style-type: none"> 〔 上野 1884 高崎

一、帰国当初・京都居住まで

新島襄生涯の移動には、徒歩以外では距離的順位では船舶、鉄道、馬車、人力車、乗馬、駕籠、牛背であろうか。一八七四（明治七）年一月二八日安中に着いた後、一二月二四日に発つまでに親類、知人宅などに挨拶に巡るのは徒歩だったのか。隣村や磯部は少し遠い。東京へは人力車で向かう。東京での文部省に田中不二磨を訪問、教会での説教などへの移動には人力車によったと思われる。東京から横浜への往復の後、翌年一月二〇日横浜から汽船で大阪に向かう船中で伊藤博文に会っている。二二日大阪に到着。一月下旬神戸に行き兵庫県令神田孝平に面会、在阪の木戸孝允を訪ねる。二月には大阪府参事内海忠勝、木戸とも何回か会っている。四月に入つて一日、京都への小旅行に出る。⁶初日は暗峠まで人力車で三里半。一マイル近く歩き、奈良まで人力車。二日には三笠山頂に登り、東大寺を巡った後、四マイルを人力車で平等院へ。三日には黄檗山、石山寺、膳所を経て大津。四日は大津から三井寺、唐崎、坂本。五日は早朝に坂本を出て比叡山、一時間で頂上、延暦寺を巡って十時過ぎに麓まで下りて、京都三条橋の目貫屋に入った。徒歩なのか、人力車だったのか。この夜M・L・ゴードンを誘う。二四日まで滞在して府知事に度たび面会。京都府参事植村正直の紹介で山本覚馬に会ったほか、各所を巡っていた。

その後大阪に行き、五月七日には蒸汽船で淀川を遡上して伏見に至り、人力車で京都に入り一四日まで滞在。神戸にも滞在した後、六月七日再び蒸汽船で京都に行き、一六日まで滞在。月末には有馬、神戸に行った後、大阪から人力車で京都に向かい、山本覚馬宅に同居することになる。それまで大阪に拠点をおいて神戸、京都での活動は新島の第一目標であったキリスト教主義学校設立ためであった。八月二三日、私塾開業と外国人教師雇入

れ許可願を山本覺馬と連名で京都府に提出する。九月一日、学校設立に関して東京に行く。帰りはやはり東京から汽車で横浜、船で神戸、汽車で大阪、一二日船で京都に戻る。

九月には山本家を出て新島丸頭町の借家に移る。かくて十一月二十九日に官許同志社英学校の開設となる。年末に大阪を訪問した帰りにはD・W・ラーネッド夫妻と共に蒸汽船で伏見からは徒歩で帰京した。

二、旅の達人新島襄

新島は一八八三（明治一六）年「兄弟ヨ今日ハ人力車、馬車、汽車、汽船ノ便幾分カ備ハリタレハ我全国ニ伝道スルハ難事ニアラス、然レトモ尚難事トスル所ハ収獲人ノ至テ少ナキ事ト、御同様ニ幾分カ伝道ニ従事ノ精神ニ乏シキ事トナリ」と記している。しかし旅行の先ぎきでの実に多くの宗教人との接触、集会などを知ると、むしろ当時の交通不便のもとでの伝道の苦難を知る。どのような移動手段がとられたかを年月を追って拾ってみたい。

新島の両親が一八七六年四月に上洛した時は船便を利用して伏見に到着、新島夫妻は伏見に迎えたが、そこからは恐らく人力車だっただろう。だがその翌年二月に鉄道が京都まで開通してからは新島の頻繁な大阪、神戸への往来には鉄道によることになる。しかし同志社女学校教師となった婦人宣教師F・フーバーとB・A・クラークソンは一八八六年三月に京都から神戸へそれぞれ自分の持ち馬で旅行している。その道中宿泊のとき馬のため農家の納屋を借りたことなどを詳細に手紙に書いている。まだそういう時代でもあった。

一八七七年の休暇に新島は八重夫人と共に和歌浦に行き十余日を過ごす。大阪からは人力車だと思われる。八

月下旬、梅ヶ畑梅尾寺を借り二人で避暑した折もやはり人力車だったに違いない。逆に七月と八月に二回「人力車で比叡山に行く」とあるのは何処までだったのだろうか。

一八七八（明治一一）年の移動を辿ってみる。一月～三月に三回の大津伝道もまだ鉄道はなく徒歩とは考えられない。三月二〇日には神戸を出帆（海が荒れ船酔いして食事もできず床に伏す）、二一日午後七時半ごろ横浜着、一泊。東京では文部省、田中不二麿、D・C・グリーン、津田仙、富田鉄之助、原女学校、麻布メソジスト公会、寺島外務郷邸などに訪れる。これら全て徒歩だったとは考えられない。三月二七日郵便馬車で高崎、それよりは人力車で翌日に安中に着く。四月二日安中を発ち、逆コースで四月二一日神戸に戻り、二二日に帰宅している。四月一五日人力車で嵐山、五月一二日に大津に伝道。六月一九日～二六日有馬集会、七月一日東京に向け出発。七月一九日～二九日伝道のため岸和田。八月五日～六日八重夫人と人力車で比叡山。八月一四日やはり梅尾寺を借りて読書と休養、一度帰宅して戻って二四日まで。二六日神戸往復。三二日夏期伝道のため学生たちと彦根。一〇月二八日神戸集會に午前六時過ぎ人力車で出発。十一月九日午前六時ごろ夫人同伴で大阪。二二日神戸教堂新築献堂式に出席のため夫人同伴で出発、二三日帰宅。一二月三日大津伝道。

一八七九（明治一二）年に入って一月一二日大阪天満教会設立式。二月七日午前三時、雪の中安中に向かい夕方到着。疲労していたが多くの来客に接した。八日には早朝からの来客に対応、夜に祈祷会。九日の日曜集會説教、晚餐礼、信者との歓談は夜一二時過ぎまで。一〇日深夜一二時半馬車で安中を出発、翌二一日午後一時半東京に着き、勝海舟を訪問し、一二日にも勝を訪ねている。一三日には人力車で森有礼に会いに行つてから横浜を出帆、帰京するが苛酷なスケジュールに驚く。五月一日には滋賀県日野（泊）、大津より汽船で彦根に。一一日大阪。二四日、八日市。六月三日は大津より汽船で彦根に午後五時に到着、受洗希望者に対する試問会。四日彦

根教会設立式、午後には按手札式、夜、記念説教会。五日、八日市教会設立式に臨む。そして一九日神戸を出航、九州伝道旅行に向かう。大分県佐賀関、宮崎県都農、高鍋、宮崎、鹿児島福山、鹿児島など船で巡り、六月末に帰京する。九月一九日には今治教会設立に当り今治に渡り二四日に帰京。一〇月八日大阪で日本基督伝道集会ほか。十一月六日大阪梅花女学院新築校舎開業式。十二月三日には安中教会、松井田伝道、前橋を経て一三日東京新肴町教会設立式の司会をしている。

一八八〇（明治一三）年二月の岡山県伝道中の八重夫人への書簡では「成丈ヶ休なく働らき、少しも早く帰京いたし度候、乍去穫り入レ時は最早参候間、実ニ農夫之急かしき秋に御座候」と伝えていた。三月に今治。四月に人力車、馬車を乗り継いで吉野山を訪れている。この他、亀山、大阪、神戸などに行っていたが、一〇月から年末に至る岡山、四国、九州への伝道旅行に絞って辿っておく。一日神戸を午後五時出航、午前二時岡山に到着（船賃一円五〇銭）。午前九時の集会からスタートする。一九日なんと午前二時岡山解纜（船賃五〇銭）、六時半多度津で乗り換え一二時半今治に着くと多くの信徒が波戸場に出迎えた。二二日朝、今治を出航、三津浜で船を乗り継いで二三日午前三時半下関に到着（船賃上等二円五〇銭）、投宿後、書簡三通を書き、温泉に入つて、壇ノ浦の砲台に行き、午後には知己三人の家を訪問、さらに午後一時半光運丸で博多に向かうが強風で沖合に仮泊して二四日午前六時半馬関沖を出発し午後一時に博多に到着した。投宿後、不破唯次郎宅を訪問し集会で説教をするという強行日程が続く。二八日不破らと福岡を人力車で出て五里、共愛会の南川正雄に面会、そこから二里余り徒行して芥屋を見物。二九日小舟に乗り芥屋の洞窟から険しい山にも登る。三〇日福岡に戻り、一日早朝、博多を出発、太宰府に回り道をして都督府楼跡などを見学、薄暮に久留米着。二日朝五時久留米を出発、高瀬で一泊。三日熊本に着く。この間「自抄」でその過程の風景、歴史を詳細に記述していることから移動

手段は徒歩ないし人力車によつたと考えられる。五日八代に行く。伝道活動。一〇日、早朝に八代を「発足」、「午後十二時過ぎ発車」とあるのは徒歩と人力車を意味する。薄暮に熊本に戻る。一日「阿蘇二発車ス」というのも人力車か。一七日阿蘇から熊本に帰る。二五日、早朝人力車で百貫港に行き、光運丸の来るのを待つが強風のため来港せず、ここで一泊。「寒風床下ヨリ吹キ入り其寒キ事実ニ名状スヘカラス」。二六日も強風のため来港せず。二七日も来港しなかつたので「二人ノ客人ト共ニ馬車ニ乗り」熊本に引き返す（二人二七銭ツ、）。二九日早朝四時に熊本を出発、陸路をとり午後六時半に久留米に至り一泊。三〇日午後二時に博多中島に着いたが乗船予定の船が夜半に出航しており、一日は船がなく、二日夜九時に乗船、一時出港、三日未明に馬関に着き、さらに東航したが、夜八時ごろエンジン故障で帆をあげるが無風で、結局二夜漂泊。五日午後一時半に三津浜に辿り着くという船旅の多難さをここでも体験する伝道旅行であつた。

一八八一（明治一四）年も大阪、神戸、有馬、八日市などのほか、近くでは円山公園、宇治へ両親と人力車で出かけたが、亀岡の耶穌教説教会へは嵐山まで人力車、それより舟で行つた。七月一日から九日の四国旅行には大阪川口で一泊、早朝船で大阪を発ち今治へは深夜二時ごろ到着。朝九時から今治教会新築会堂開業式、夜の親睦会で説教。四日午後四時今治を出帆、八時ごろ三津浜到着。人力車で松山へ。七日松山を出発、三津浜から船で大阪には八日午後に着き、九日に帰宅している。九月には大阪から人力車で岸和田に行く。十一月三日には同志社生徒、市内信者らと上賀茂神社へ親睦の遊歩をしている。

一八八二（明治一五）年一月九日、土倉庄三郎に会うべく大阪に行くが、来阪していず近く東京に赴くことを知らされて大阪に一泊して吉野の大滝村を訪ねることにする。人力車と徒歩で御所まで行つて一泊。一日風雪のなか大滝に着き土倉家に宿泊。翌日から三日間連続説教。土倉には大学設計計画を語り五千円寄付の約束を得

ていた。一六日大滝村を出発、人力車を乗り継いで大阪に戻り一七日に帰宅した。三一日には長浜に行くべく大津に行くが、その前に出航して夜九時まで待ち、長浜に着いたのは夜一時過ぎだった(船賃五五銭)。四月六日汽車で大阪、翌日テイラー医師に受診、午後神戸では松山高吉に借りた鉄砲を返すために高橋熊吉宅へ。八日神戸から人力車で高砂へ。途中に大きな溜池があり梟を見て発砲したが当らなかつた。一日高砂から船で神戸へ(船賃三八銭)。松山高吉らに会い、板垣退助遭難のことを聞き、大阪に寄らず帰宅。一七日板垣が彦根より船で大津に来ることを聞き大津に出迎えて大津発の汽車に同席して京都に帰る。二一日大阪で板垣を見舞った後、大阪川口から小蒸汽船で明石に。そこから人力車で加古川を経て姫路泊。二二日人力車で十一里半走り、生野銀鋏を見物し竹田まで行つて宿泊。二四日竹田を出発、豊岡を経て日本海側の城崎湯島で一泊。二四日人力車を雇つて荷物を持たせ、新島は徒歩。久美浜からは人力車に乗るが、比治山峠は険しくて徒行したらしい。岩瀧から小舟で宮津に一泊。二六日福知山に向う。途中、案内人を雇い大江山に登り鬼の窟を見物する。二七日悪路に阻まれて亀岡まで行けず八木に一泊。二八日亀岡の村上を訪ねた後、京都に帰着した。六月一四日から一七日まで彦根、長浜に出かける。もちろん大津からは船。七月三日から九月一五日までの長旅に出る。徳富猪一郎ら五人が同行する。大津から夜行の船便で米原には夜明けに着き、徳富と浅湯は先発。他は人力車で出発。六日中津川で伊勢は疲労して歩行できず、新島と二人は乗馬で馬籠。七日新島、保坂は荷馬に乗り、野尻からは人力車。須原からは徒歩。寝覺の床で名物のそば食い競争、新島は八杯。伊勢は人力車に乗り、他の五人は徒歩で日没後に木曾福島。八日福島を出て藪原から奈良井まで人夫を雇い荷物を託し鳥居峠を越えて、本山からは馬車で一時半後に塩尻。そこからは各自荷物を肩にして塩尻峠を越えて下諏訪に着く。九日の日曜日には諏訪湖畔を散策。一〇日は一里余を徒行、それより新島と伊勢は荒神(一頭の馬の背の両側に杵を付けて二人乗り)で一里半ほど

乗る。途中雨に会うが傘もさせず、辿り着いた茶屋で背ゴザを求め和田まで。ここで昼食後、人力車五台を雇うが、峠越えは困難なため山の裾を回り小村長瀬で投宿。一日長瀬村から善光寺街道の田中に至り、そこから馬車で小諸、軽井沢。新島と伊勢は荒神に乗り、他は徒歩で坂本。ここから馬車で安中に着いたのは夜八時。八重夫人は伊勢峰、江馬かねと神戸から海路横浜を経由して安中の湯浅宅に先着していて新島を迎える。他は山田屋旅館に泊る。一二日からは諸友に会い、集会で演説、説教。徳富は東京に向け出発。一八日新島夫妻は伊勢時雄夫妻と同道、安中を馬車で出て、高崎で人力車に乗り替えて木崎村で一泊。一九日早朝五時半に人力車で出発（人力車ハカヒ十二銭ノ規則ナレトモ、時刻夕景ニ近キヲ以テ、車三台を二円五十銭ニテ雇フ）。一九日早朝五時半に二人曳人力車で出発。太田からは馬車で鹿沼。この日人力車で二里、馬車で一七里。二〇日人力車で鹿沼を出て、午後二時日光着。案内人を頼んで東照宮見物。二一日新島は歩行、八重夫人は駕籠で華嚴滝、中禅寺などを巡り午後七時日光の宿に帰る。二三日安息日。二四日人力車で阿久津、そこから久保田まで舟（舟賃二四銭五厘）。黒磯で一泊。二五日白河に向かうが途中、黒川が氾濫し橋が流されたため半日近く川止めとなり夕暮れに白河に到着。二六日白河より山越え、一日半の行程を乗馬。二七日に会津若松に到着。八月一日に伊勢を同伴、若松から人力車で塩川（三三四五銭）。ここで人力車を乗りかえようとするが、一里二五銭と高額で馬を雇い大塩、夕食後夜になって出発し深夜に檜原村に着いて投宿。二日檜原を人足を雇い徒行で出発、綱木峠を越える際に非常に疲れを生じ、休み休み綱木に至り、牛馬を雇って関村に行こうとしたが疲労甚だしく、やむをえず綱木に投宿。荷物は綱木の戸長が関村に送ってくれる。三日綱木より歩いて関に行き、関から牛に乗って高湯に向かう。途中、温泉での自炊に備え食品を買い入れ、高湯では伊勢と同宿してご飯だけは宿に頼み、他は自炊して一八日間を過ごす。この間A・ハーディから頼まれた青春時代の手記を執筆している。二一日高湯を出発、荷物は運搬人を雇

い、新島、伊勢は徒歩で米沢に向かい午前十一時ごろ到着し、市内見物。夜、甘糟三郎を訪問。二二日土地の人の案内で製糸場、上杉謙信の墓、私立学校を訪問。二三日人力車で米沢を発ち関村で伊勢と落ち合い、徒歩で檜原、峠を越えて夕暮れ前に大塩、旅館に一泊。二四日熊倉の手前で、若松に向かう伊勢と別れる。九月二日に東京に帰り、一二日夜、横浜に行くまでに小崎の教会での説教、津田仙、海安芳、後藤象二郎、板垣退助らに会い、横浜ではJ・H・バラを訪問している。一三日午後六時横浜を出帆。一五日午前一時神戸に入港、午後五時京都に帰って七五日に及ぶ長旅を終えた。一月一五日には神戸に行き、W・C・ジェンクスらを訪ねた後、午後七時船で岡山に向かい、翌日午前四時に着き、人力車でペリー宅へ行く。同氏宅の集会で医学校設立について協議、二二日、帰米中のデイヴィス一家を迎えるべく神戸に戻り、二五日一家と共に京都に着くのを全学校の教師・生徒が七条駅に迎えた。

一八八三(明治一六)年の大阪三回、彦根二回、神戸、八日市、園部行きは省略する。三月一二日深夜大津発の汽船で翌朝五時二〇分米原に着き、人力車で醒ヶ井まで行き一泊。一四日午前四時人力車で岐阜(一三里を一円五銭の談判)。一一時に到着、午後岐阜県庁を訪れ、学務課員に案内されて女子師範学校に行く。一五日金華山に登り織田信長の旧居城を見た後、再び女子師範に行き、岐阜を人力車で出発、大垣に着き投宿後、旧友三羽良明を訪問。一六日七時に出発、途中三羽に会い、芳賀貞軒の家に案内される。その後関ヶ原を経て人力車を乗りつぎ、風雪の中を長浜に着く。この夜の集会に一五人が参加。一七日長浜を出帆、午後四時帰京。五月一日午後六時神戸を出航、三日午前六時横浜に着く。東京では八日から一二日まで第三回全国基督教信徒大親睦会に出席。その後、日本銀行に富田鉄之助を訪い、大学設立資金募集依頼、中村正直に同志社大学につき賛助を請うなどして一八日馬車で安中に向かう。熊谷に一泊して、安中では伝道説教。二一日の帰途に倉賀野で松本勘十郎と

会って大学設立の賛成を得て熊谷に一泊。二六日横浜を出帆するが、珍らしく四日市に午前三時に上陸、人力車で午後九時帰京する。八月六日越前に向かうため大津から汽船で長浜に着き一泊。翌日長浜を人力車で柳ヶ瀬に向かい洞道から汽車で敦賀に着き、船で三国港を経て、八日に山中温泉泉屋に泊る。腸を害し宿の主人から親切な世話を受ける。休養のため一七日まで滞在するが、熱心な真宗信徒の主人は新島を一室に呼び「低頭平伏シテ一言忠告セン事ヲ乞フ」ていた。「昨夜談サレシ所耶蘇教ハ、何卒滞留中ハ何レノ客ニモ御談被下間敷様仕度候、此地並ニ大聖寺辺ト雖、兎角頑固人ノ多キ事ナレハ如何ナル困難ノ起ラン事モ計リ難シ飯ニ御身ニ災難ノ及ンデハ私迄迷惑可仕候故、臥テ御談ナキ様注意アリタシト、懇々説論ニアツカレリ」と言われたことがあった。新島は「出遊記」の文末に「一笑」と記している。⁽⁹⁾一七日にいったん山中を人力車で出て大聖寺で一泊して山中に戻った後、多分二〇日ごろ再び大聖寺を経て、二二日人力車で福井に行き、早速その夜に演説会をしている。二五日福井を人力車で出て三国港から敦賀に着くが、すでに当日の汽車はなく一泊。二六日は安息日で午後の汽車で長浜に向い、夜、長浜の信徒の集会で説教している。二七日に帰京した。一月八日京都を出て岡山に向かう。翌日岡山の教友と共に高梁に行き、一〇日には森本介石の按手礼式、野外親睦会、夜に大演説会。翌日も宗教行事。一二、一三日には笠岡でも同様に過ごして一四日岡山に戻って一九日まで逗留。J・C・ベリーが一カ月ほど岡山で休養するようにと勧めるのを振り切つて、二〇日に帰京した。ベリーはボストンのN・G・クラーク総主事に「新島を来春早々外国で休養させることは出来ないだろうか。彼自身の健康と伝道上の利益を考えても長期の休養が必要」との書簡を送っていた。

一八八四（明治一七）年一月三日の大和郡山教会設立式のため二日に京都を出て、四日の説教会の後、五日に大阪に向かっている。一月三〇日に東上して二月二〇日に帰京する。東京では多くの信徒たちを訪ねるが、三日

の安息日に東京第一教会の説教後頭痛のため医師の診察を受け人力車で宿に戻つて臥床。八日からは伊藤博文、大山巖陸軍卿を訪れ徴兵猶予の特典を陳情するが朝令暮改はしないとの冷やかな返事に失望。その後熱海に向かうことにして汽車、人力車を乗り継いで小田原に一泊して、未明に出発、悪路七里を歩いて九時半ごろ熱海に着、福島屋に投宿。午後五時過ぎ不二屋別邸に「○○公」（伊藤博文？）に会うが「徴兵令ノ事へ前日縷々ノ談判アリタレハ」とて主として宗教問題について一〇時ごろまで談話した。一日夜九時出帆の汽船に乗り、二日朝品川に上陸。汽車が未だ出ないため馬車で新橋（二里四錢）に着き、牧野伸顕を訪う。一日には品川弥二郎農商務大輔を訪問し徴兵猶予について「○○公」を説得するよう要望、さらに文部省に九鬼隆一を訪ねるが「私塾には徴兵猶予特典を与えたい旨」を答えられる。一日に牧野伸顕、一日には人力車を雇い「○○公」を訪ね、学校の組織、目的について説明、徴兵猶予を陳情し「○○公」より文部卿に伝える約束を得ている。一日にも田中不二麿に会い徴兵令の特典について陳情するが十分な回答をえられなかった。この日横浜を出帆、二日朝に神戸に上陸。二日朝、同志社で徴兵問題について上京の結果を生徒に報告、そして「今ヨリハ正良ノ私塾ハ倒レ、有名無実ノ官公立校多ク出デン、好シ我同志社ハ仮令生徒悉ク去ルモ依然トシテ此相国寺前二建置クベシ」と訴えた。

かくて四月五日に府下の紳士、三教会の信徒、同志社生徒ら百余名に見送られて七条駅を出発、大阪では広瀬宰平を訪れ大学援助を依頼、大阪四教会の牧師信徒による送別会に臨み、神戸では六日午後、神戸教会で説教後、イギリス汽船キヴァア号に乗船して一年八ヶ月に及ぶ欧米旅行に出発する。

一八八五（明治一八）年一月一九日フィシャー夫妻、タルカット、同志社卒業生森田寿三郎ほかに見送られてサンフランシスコを出港、二月二日横浜入港、出迎えた小崎、松山、山崎の三人と共に東京に向かった。

一四日帰国歓迎会、夜に富田鉄之助を訪問、東北伝道、英学校設立などについて語る。一五日午後四時横浜出帆、一七日午前七時神戸入港、八重夫人、中村栄助らの出迎えを受ける。七条駅に市民、教職員、生徒ら四七〇余人が出迎えた。その翌日一八日は多忙であった。朝から同志社礼拝堂、書籍館（有終館）の定礎式、同志社創立十周年祝会、夜には帰国歓迎会が開かれ、新島はそれぞれに出席して挨拶、欧米での見聞について演説している。さらに二〇日に四条教会で説教、二二日には神戸英和女学校創立十周年祝会で祝辞を述べている。

一八八六（明治一九）年一月五日神戸で開催の伝道会議に出席し九日に帰京。一月二〇日に神戸を出帆、二月四日横浜から帰西の途につく。前橋、高崎、安中、原市への旅行中にも二日間病臥している。五月一四日には仙台学校設立にかかわる旅に出るが、その始め大阪で宮川経輝に会い、神戸では滞在中の三条実美内大臣を訪問し、ともに看病婦学校設立賛助を請うている。仙台へのコースを辿ると、上野発の汽車で宇都宮、それより馬車で三島（泊）。馬車で郡山、昼食後人力車で山潟（泊）。汽船で猪苗代湖を渡り会津若松へ、その夜求道者尋問会。翌日の二三日は洗礼式、夜には上ノ町で演説会。二四日喜多方で夜に説教会。二五日、二人曳人力車で米沢に向かう。途中、道が険しく塩地平まで歩くが、ここで心臓に異常をきたして旅館で三時間休息し夜一時過ぎ米沢に至って投宿。二六日には中学校に行き、夜、学校幹部より松岬館に招待されキリスト教育、女子教育について語り一〇時過ぎに帰宿。二七日朝出発、福島（泊）。二九日馬車で仙台に至る。旅行目的の学校設立にかかわる人びとと折衝を重ねて、六月三日仙台を二人曳人力車で福島を経て二本松まで二七里（泊）。四日朝五時人力車で出発、白河で昼食後、人力車を乗り継いで喜連川で一泊。五日人力車に先曳きをつけ朝四時に出発するが道路が悪く、六里半に三時間かかって宇都宮に着き、仙台学校に五千円の寄付を得たことを父親に電報で知らせた後、汽車で東京に向かった。東京では直ちに富田鉄之助を訪れて仙台の報告、協議をし、午後には湯浅、小崎、松山

が来訪、夜には伊達宗敦に会う。六日朝、新橋を出て横浜を一二時に出帆、六月八日に帰京した。七月にも仙台に赴く。一六日に神戸を出て、往復ともに主として海路を利用して八月六日に帰京した。八月九日から二八日は八重夫人を同伴して神戸近郊東垂水村の滝ノ茶屋に滞在して海水浴、海岸散歩など休養をして過ごす。この間にも明石教会での説教をしている。その他、大阪、神戸、東京、長浜、園部などに出かけていた。なお、六月に「二人乗人力車の廢車届を上京区長に出す」と年譜に記されている。

一八八七（明治二〇）年。この年について、まず六月から一〇月におよぶ東京、仙台、北海道への旅の目的、移動ルートと手段を簡略に記述する。六月一日京都を出発、神戸より船で横浜、上野駅から汽車で黒磯（宿で心臓に激痛を覚える）、黒磯から人力車で福島。一五日人力車で夕方、豪雨の中、仙台に至る。一七日は東華学校開校式で演説、夕方、市中の名士を招待して祝賀晩餐会。一九日には富田鉄之助らと松島を見物。三〇日仙台を出発、塩釜で一泊。七月一日蒸汽船で出発。三日早朝に函館に着き、四日間滞在する間、多くの知己に会い、八重夫人を伴って密出国した波止場に行き往時を懐旧している。六日函館を出港して、七日朝小樽に入港、汽車で札幌に行き、駅に迎えた富士成豊、大島正健らと再会し、富士の家で旅装をとく。富士が持ち家を新島夫妻に供している。避暑休養が主目的とはいえ、多くの知己と接し、諸教会、札幌農学校、スミス女学院（現北星学園）、空知集治監などを訪れ、小旅行もしている。八月二七日石狩郡当別村では騎馬通行中に乗馬が足を痛め、同村で一泊もする。九月一七日小樽から海路函館に行き、翌日美似教会で説教、二〇日函館を出航し萩浜に向かう。この日塩釜までの連絡船が出ず、仙台行きを断念して横浜に向かい、一〇月一日に長旅を終えて帰京する。この年にも、大阪、神戸、木津、奈良、岡山に出かけている。

三、病に真向う旅

一八八八（明治二二）年一月一日同志社に行く途中の御苑内で動悸のため一歩も進めなくなり、休息して辿り着いて新年の挨拶をするが、再起できず、八重夫人の乗ってきた人力車で帰宅。ペリー医師に受診している。この動悸は永眠に至るまで全癒することがなかった。その後もペリーは繰り返し診察しているが、ともかく休んで療養すべきを伝えていた。渡米に関しては二月一二日の社員会（新島宅）で寄付金募集のため新島の渡米に補佐役を付き添わせることを決めた。二七日の社員会（山本宅）では金森通倫の同行、渡米費用は土倉庄三郎より借用することを決定していた（その前の二〇日には新島は大阪で土倉に会い、渡米への援助を求め承諾を得ていた）。しかし三月三日の社員会（山本宅）では新島の病気を懸念するペリーらの宣教師の申し入れを受け、新島の渡米中止を決定した。ペリーは向う三ヶ月の療養を勧め渡米は自殺の策と伝えていた。しかし新島は「今回生死二閑ラス是非一撃ヲ試ミ度存居候、何レ出発ハ六月中カ七月早々タルヘシト存候」と徳富に発信していた。それは兵役免除のない同志社に確固たるキリスト教主義の大学を作り、より優秀な教師を雇い、より高い教育レベルにすべく、その資金を募る必要であるとの思いが決意させていた。この前後大阪に行き、大塚麿に同志社への援助を頼み、田中城太郎、寺島武太郎から応分の尽力の約束を得、神戸では滞在中の井上馨に専門学校への協力を依頼している。専門学校設立について智恩院で集会を催したのは四月一二日であった。そして四月一六日から一〇月二五日に至る、募金、徴兵猶予、教会合併問題と闘病の長旅に挑むことになる。四月一八日の湯浅治郎、陸奥宗光、富田鉄之助、井上馨訪問から始める。しかし二〇日にはベルツ医師の診察を受けるため森有礼を訪問して紹介を依頼。二二日には橋本綱常陸軍軍医の診察を受け、午後井上邸で明治専門学校設立に関する会合が開かれ、

青木周蔵、陸奥宗光、洪沢栄一、原六郎ほかが出席した。質疑応答中に新島は脳貧血を起こして退席し、橋本軍医の手当を受けたのち馬車で帰宿している。二三日にはベルツ、難波一両医師が来診、難波は五月四日まで毎日來診。六日には看護婦を雇う。ベルツは九日にも診察して「当分休養すべし」と診断した。しかし人力車で外出したり、見舞の知人と散歩したり、大隈重信を訪問したりしている。一九日には横浜に行き二〇日に渡米する陸奥を見送り、二一日に鎌倉に行き投宿するが呼吸困難となり眠れず、翌日鎌倉に滞在中の富田鉄之助を訪ねて二四日まで夫妻の手厚い看護を受け、海浜院に入院する。入院中たびたび富田の寄留先へ遊びに行き、富田夫妻も海浜院へ見舞っている。また光明寺宝蔵を見物したり散歩に出て人力車で帰ったりもした。八重夫人への手紙(五月三一日)では「あまり大げさに心配して重病との評判がたつと専門学校賛成者が減少するのでなるべく内々にしておくように注意」している。六月八日に八重夫人が来院すると朝夕共に海辺、八幡宮などに散歩した。一日夫人と共に東京に戻る。そして一三日には小崎弘道、湯浅治郎と東京大会開催の下相談をしている。二〇日朝に大病院へ行つた後、森有礼文部大臣に会い専門学校の賛同を得ている。この日の前後には北垣知事、井上馨に各三回会い、洪沢栄一らにも会っていた。二四日には大隈に面会して専門学校について相談し、橋本軍医に会い病状の説明を受けた。さらに二九日にはベルツの診察を受け「回復ハ期スヘカラス無理ナル微動トエキサイントメントヲ避クベシ」と診断されていた。七月二日八重はひそかに難波医師に呼ばれ新島の病状について「心臓病ハ全治ヲ期スベカラス」と伝えられた。新島自身「予ハ元來全治ノ望ミナキハ已ニ知り、又イツデモ天父ノ招ニ応シ」る覚悟をしていた。七月一九日に井上馨が馬車で新島を迎え、大隈外相官邸で専門学校設立について集會を開き、合計三万一千円の寄付申込みを得ている。二一日には井上を訪問して礼を述べ、森有礼を訪ねて徴兵猶予を得る方法手続き、大学設置学科について相談した。二三日にも井上を訪ねて森文相との協議を説明し、夜

は矢野文雄、朝比奈知泉を芝公園内三緑亭に招き、徳富、伊勢、小崎らと同席して歓談した。

七月二四日伊香保で静養のため汽車で前橋（上等二円一〇銭）に向かい三泊する。ここでも何人もの知己に会い、下野地方伝道について協議。後藤医師の来診を受けている。二七日医師の世話で駕籠に乗り夕方伊香保に着く。二人が先導、付添人三人。荷物は人力車（七五銭）。渋川より先引一人（四〇銭）、駕籠二人増（五〇銭）、駕籠人足三人（七〇銭ずつ）。八月一六日に八重夫人が来伊し、一ヶ月を共にした。九月一五日新島は山駕籠、八重は人力車で伊香保から前橋に移動して二泊する。両日とも後藤医師が来診。一八日には前橋の教友に見送られて汽車で東京に向かい、小崎らが出迎えた。一九日湯浅が来訪して社員会の報告（大学の名称を同志社にすることなど）。一二日井上馨を訪問。一五日山竜堂病院に入院し二九日に退院。その入院中に岩崎弥之助に招かれて小崎を同伴して午餐をともしてもいた。退院後にも諸集會に参加、井上馨、大隈重信、岩崎弥之助、青木周藏、勝海舟、榎本武揚、田中卯吉、竹越与三郎ほかも訪問。来訪者もあり多忙であった。一〇月一九日には「昨夜再ヒゼンソク相発、半夜一騒キ致シ候得共、今朝ハ少々落付申候」と徳富宛書簡中に記している。二二日に新橋を出発帰京の途につく。二三日は横浜港から「新造ノ西京丸故中等モ他ノ上等ニ異ナラス、食物モヨロシク、実二病人ニトリ殊ノ外ノ幸ト云ヘシ」とて、二四日神戸に安着。一泊して朝八時の汽車で帰京、半年におよぶ長旅を終えた。帰京後には医師から生徒との面会を禁じられていたが、一一月一日には夕方に波多野培根、夜には柏木義田をひそかに自室に招いて教会合併について苦衷を訴えたり、徳富が来校して大学設立について演説するのを聴衆に交じって聞いたり、植木枝盛がチャペルで演説するのに臨席したりした。また京都に滞在中の徳富を招き人見一太郎、金森通倫を交えて夕食を共にしたりもしていた。前橋の後藤医師への書簡（二月七日）では夏の滞在中の礼を述べ、このところ「少々肉付キ申、心臓ノ動脈モ段々規則定ル様ト相成リ近來日日一時間ハ乗

馬致シ候毛別ニ障モ無之」と伝えてゐる。一二日には八重夫人と共に賤部莞の馬車に同乗して七条駅に行き神戸に向かい、大阪で宮川経輝に会い、神戸では英和女学校ダッドレー女史宅に泊り、翌日諏訪山和楽園の借家に移り療養生活に入る。

一八八九(明治二二)年、新島夫妻は和楽園で新春を迎える。前年一二月から三月三〇日まで三ヶ月半滞在する。この間にも児玉惟謙大阪控訴院長、高島鞆之助大阪師団長、遠藤謹助造幣局長、兵庫県会議員らに会い、大学設立資金募協力を依頼しており、多くの有力者、知己に同様の書簡を送っている。三月三〇日に神戸から帰宅したが京都の寒さのため、ペリー博士の勧告により四月八日再び神戸に行き、J・E・ダッドレー方に二七日まで滞在する。七月二三日から二七日まで大阪に行き、児島控訴院長、高島師団長を訪問してその意見に従って有力者らを招いての晩餐会、訪問など寄付を依頼し、三一日にも同じ目的で大阪に行き一泊している。八月三日休養のため八重夫人同伴で播磨の東垂水村に行き一九日までの間にも度々大阪に行つて大学設立、募金交渉を行なっている。その後有馬に移つて三〇日に帰宅するまで滞在した。九月には脚気のため夜間は円山の正阿弥楼で過ごしたりして、医師からは健康のため旅行を見合わせるように言われていた。しかし新島の熱意から三週間に限ると念を押されて東上を決意。一〇月一二日神戸を出港、生涯の最後の旅に出ることとなった。東京では関係者への訪問や来訪。横浜へも二回出かけている。しかし風邪のため外出を控えたり、「胃病、脳病相起り今尚臥床致シ居次第、又寒気モ相催シ来、ストヴナケレバ一日モ堪兼候次第」(一〇月三二日和田正幾宛書簡)だった。一二月に入つても「病益宜シカラス」の状態で前橋に向かい、二六日には群馬県知事佐藤與三らに面会して大学計画、募金に協力の依頼を始める。しかし二八日夜に腹痛、翌日医師の診察を受け、胃腸カタルのため臥床が続く。この日から不破唯次郎牧師夫人のユウ(京都看護婦学校第二回卒業生)の看護を受ける。一二月一三日永岡

喜八書記に付添われて前橋駅を出発、午後上野駅に到着し茂林館に投宿。医師の診察を受ける。一五日徳富が来訪して神奈川県大磯で暫く保養することを勧めた。二七日やはり永岡が同行して大磯に向ったが、この日午前〇時から茂林館で在京社員会を開いていた。大磯では百足屋の離れ座敷二室を借りる。ここでは寒さを覚えず少々運動もできていることを徳富に伝えている。また、同志社生徒横田安止には「氣候の温和なる此大磯の浜辺に蟄居し他日の雄飛を計る小生の心情は如何なるものぞ御洞察あれかし」と書き送っていた（二月三〇日）。

一八九〇（明治二三）年の元旦は永岡書記と迎える。二日には徳富、小崎、金森が来訪、七日には前橋から不破夫妻が来て、ともに一泊している。一〇日八重夫人に「氣候の暖かなる故か段々丈夫に相成り候間御安心被下度候」と書面をしたためていたが、一日夜にわかに胃腸の痛みを生じて終夜苦しむ。翌日医師の手当を受けるが、その後は断続して病痛に苦しみ、一七日には東京から来診の櫻村医師が急性腹膜炎と診断し、甚だ重態である旨を告げる。一九日朝、永岡は八重夫人に至急電報を發した。二〇日終日疼痛が去らず、医師の診断結果を徳富、不破ユウらに電報で知らせる。徳富は東京出發のさい小崎に連絡して大磯に急行、続いて夜一〇時に不破ユウ、一一時に八重夫人が到着した。二一日朝、新島は八重、徳富、小崎を枕辺に呼んで二時間にわたって遺言し、徳富がそれを筆記した。この日「センセイビヤウキトク」の電報が同志社に届き「満校沈肅たり三々五々校の内外各処に集いて熱袴のなかに余光を送り、「日没して大祈禱会を礼拝堂に催」した。二三日午前三時ごろ新島は見舞いの者を一室に集め、その手を握り別れを告げた。午後二時二〇分ごろ永眠。二四日に遺体は八時八分大磯発の汽車で午後一時二〇分七条駅に到着。同志社は全校休業。午後六時から祈禱会、七時半より記念感話があり、新島を迎えるため七条駅に行く。教職員、男女生徒、友人ら、およそ六百人。柩は氷雨のなかを生徒らに担がれ、人びとがその前後に従った。午前一時新島邸に入る前に柏木義円が祈禱を捧げた。二六日の日曜日チャ

ベルで感会。新島邸では柩が開けられ、最後の対面が午前一時より女学校生徒、正午より男学校生徒が別れを告げた。二七日午前一一時半の出棺式後、社員、教員に担がれて告別式が行われる同志社に向かう。参列者はチャペル内外に四千人。式後、この頃より雨が降るなか柩は同志社生徒に担がれて若王子山頂に向かい、同墓地に埋葬された。中村栄助の司式により埋葬式が行われ、午後五時に式を終わった。

むすび

顧みると、新島襄は旅の人であったのを痛感させられる。当時の交通手段、健康上の苛酷な条件のもと、何がそれを突き動かさせたのかを見てきた。さらに言えば、同志社、キリスト教伝道のためというのを越えて近代日本のための必要を信じての行動だったと言いうる。東上するだけでも二昼夜を要し、徒歩、人力車、船便（天候にも左右される）を主とし、最速の連絡は近くは使用人を走らせることが出来たが、遠くは郵便局に行つてする片仮名の電報のみだった時代（それも局員が届ける）に教会人のみならず、中央、地方の政界、財界、軍、報道、教育関係者らの極めて広い分野の人脈を築いて、その目的達成に、文字通り献身の尽力を捧げていたのに驚嘆する。

その反面、同志社諸学校の責任者であり、京都の諸教会を担う立場にある新島が、あれほどに京都を留守にすることが出来たのは、同志社を担った同志ともいふべき宣教師、同志社人らが居てこそ可能であったことを忘れてはなるまい。

また、本稿中でも多少触れたが、旅行中にも病床にあっても夥しい数の書簡を記している。『新島襄全集』中

の第三卷、第四卷は書簡編、第六卷は英文書簡編、第九卷は來簡編（二冊）、第十卷は「新島襄の生涯と手紙」にみられるように、新島は書簡の人でもあった。これらに収録されていない一日に何通もの連絡、依頼、礼状を出すこともよくあった。

同時に、多忙な中にも化石、鉞脈などへの関心や狩猟も、しばしば折り込んでいたのも新島のもつ一面であった。本稿中でも度々触れたがその類の数例を拾って結びとしたい。

帰国直後、安中から親戚、知人らと妙義山中の獄を辿り当時発見された鉄鉞脈を見に行っている。一八七八年四月には安中を発つ前に後閑村で知人に案内されて一里ほどの山中で化石を採取している。一八八〇年二月、高梁では流星ひかりものが落ちたとの風説を聞いて案内人を雇って一里余も探し歩いた。その年の一〇月には福岡近くの芥屋へ小舟で洞窟を見物する。一八八二年二月大阪府下土室村の知人の招きにより雉を撃ちに行くが獲物はなく、四月には兵庫県高砂で小舟を雇って梟撃ちに行くがやはり成果はなかった。一八八三年四月新島公義、小野俊二と琵琶湖上の狩猟に行き水鳥の一羽に当たるが逃げられてしまってもいた。これらの類を追うことによって新島のもう一面を見ることが出来る。

注

- (1) 陳舜臣「風月同天―馬車のなかった国―」『読売新聞・夕刊』二〇〇七年九月一日。
- (2) 木下良『道と駅―日本を知る―』大巧社、一九九八年、一三四ページ。
- (3) 同書、一三〇―一三二ページ。
- (4) 新島襄全集編集委員会編『新島襄全集 8（年譜編）』同朋舎、一九九二年、一三二ページ。
- (5) 木下良、前掲書、一三一―一三七ページ。

- (6) 以下は主として①森中章光編『改訂増補新島襄先生譜年譜』学校法人同志社・同志社校友会、昭和三四年。②『新島襄全集 8』。
- ③『新島襄全集 5 (日記・紀行編)』中の日抄、日誌、遊興記事、出遊記、漫遊記事に拠って論考する。但し①と②には齟齬するところがあるが適宜に判断した。なお、田中真人「新島襄の移動空間」(伊藤彌彦編『新島襄全集を読む』晃洋書房、二〇〇二年)は日本国内のみならず、新島襄の在米、訪欧を含めて移動空間、移動手段を総合、分類してとらえており、拙稿の先行研究としてきわめて貴重である。
- (7) 「基督教皇張論」『新島襄全集 2 (宗教編)』四〇二ページ。
- (8) クラーク書簡、一八八六年三月二八日。
- (9) 『新島襄全集 5』一三二二ページ。

